

からだの内と外

個人的な話だが最近職場が変わったので、それともなって通勤も自転車から電車に変わった。それ以降、体型¹が気になって、徐々に食事の量を減らしている²。自転車をこぐという日々の運動が、いかに健康に役立っていたのかを実感するこの頃である。また、先月急にぎっくり腰になってしまった。長時間座って仕事をしていたからか、はたまたストレスのせいなのかは分からない。接骨院と整形外科³、どちらに行こうかと迷ったのだが、結局ペインクリニックに行つてブロック注射⁴というのを打ってきた。それで大分良くなったのだが、人間 30 歳を過ぎるとからだに色々と不都合⁵が出てきて困る。

石崎尚（目黒区美術館学芸員／身長 171cm、体重 66kg）

¹ 人間の輪郭は遠くから見ただけでも、その人と分かる特徴がある。富井大裕と奥村雄樹は、奥村の立ち姿をもとにドローイングを描いているが、それは見事に奥村の身体的特徴を伝えている。富井の《ドローイング》、奥村の《MAZE-MAN(Silver)》を参照のこと。

² 体脂肪率と共に肥満の判定に用いられるBMI (Body Mass Index) は、体重の数値を身長²の二乗の数値で割り出した指数。量感を意味するマッス (mass) は、彫刻の概念でもよく用いられる。ちなみに美術館のキャプションなどでは、彫刻作品のデータは「高さ×幅×奥行き」のように記述されるが、重さの表記に関しては見たことがない。しかし、外見からは伺い知ることの出来ない重さも、彫刻を考える際には興味深い情報となるのではないだろうか。ちなみに今回、展示されているもので最も重いものは富井の《wrap(bend-3)#5》に使われた台座で、約 70kg である。

³ 富井の興味が主に人体の「外部」に関するものであるのに対して、奥村のそれはからだの「内部」に関するものである。例えば、富井の《figure》は、我々がどのような形態を見てもつい「人のかたち」を想起してしまうことをテーマとしているが、奥村の《Tube》は口から肛門に至るまでの消化器官系をモチーフとしている。富井は「見る」という行為への意識そのものを作品に取り込み、奥村は「見えない」内側の不可思議さを想像し補強するために作っている。しかし、主題を作品として仕上げていく手つきを考えたとき、概念的な正中線を表そうと《wrap(bend-3)#5》で、かたちを探り当てていく富井が「内科的」であるのに対して、臓器や骨格をそのまま取り出そうとする奥村は「外科的」であるとも言えるのだ。

⁴ 脊髄を覆う硬膜外腔に打つ局所麻酔注射のこと。人類が二足歩行を始めて以来、垂直に立つ脊髄は人間とそれ以外の動物を分ける象徴である。しかし、腰には重力の負担が集中するため、腰痛は現代人に共通する悩みでもある。フェティッシュな輝きを持つ奥村の《Pole》には、重さに耐える脊髄のきしみも見え隠れする。

⁵ 人間の感覚はほぼ 9 割を視覚に頼っているとされるため、からだに対する意識が外見的なものに偏るのは当然のことだろう。だが、しばしばからだの不調によってもたらされる痛覚は、普段は目に見えないからだの内部を思い出させる。大げさに言えば人間は、からだは自分の思い通りにいかずに死を意識した時にだけ、自らのからだの内側に思いを馳せるのだ。